

---

## 開会挨拶

---

【司会】 みなさんおはようございます。本日は日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」へのご出席、まことにありがとうございます。

まずはじめに、台湾国立政治大学の呉思華校長にご挨拶いただきたいと思います。

【呉思華（台湾国立政治大学校長）】 東京大学ならびに政治大学の先生方、学生のみなさん、おはようございます。本日はこのような会議に出席することができ、たいへん嬉しく思っております。政治大学を代表して、みなさまに歓迎の意を表したいと思います。

生と死というものは、人類がけっして逃れることのできないものであり、文明が発展するにつれ、我々は生と死をますます重視するようになってきています。近年、台湾においては、葬送儀礼の重要性が再認識されていますし、台湾各地で、ホスピスやターミナルケアといった取り組みも増えてきています。これらの出来事は

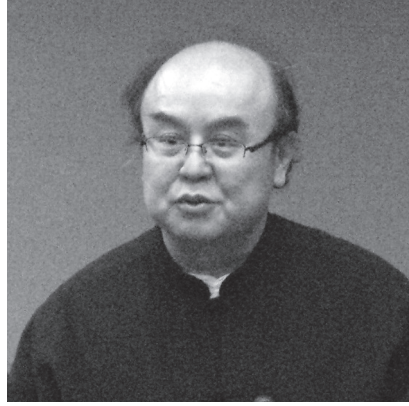


吳思華氏

すべて、死を重視する姿勢を表していると思われれます。また医療技術の発展等によって、臓器移植なども増えてきています。しかしこれらのことは同時に、我々の生——生きるということに対するとまどいを増幅させてもいると思われれます。そのような意味でも、これらの実践ならびに理論における課題への取り組みというものが、ますます重要になってきていると言えるでしょう。このようなことから、死生学というものが、社会科学において非常に重要な学問となつてきていることがわかります。

日本と台湾の死生学にたざさわる学者が会する本日の会議は、本当に得がたい、大切な機会です。死生学に関する議論・実践というものは、それぞれの文化背景や宗教伝統によつて、大きな相違があります。だからこそ死生学には、文化を超えた国際的な研究というものが必要になるかと思ひます。台湾と日本はともに東アジア文化圏に属し、似通つた文化的要素を持つているので、そのような似通つたものの中にある異同を比較することも、非常に重要になってくるでしょう。今回のこのような会議の場を十分に活かして、台湾と日本の学者の交流が促進され、西欧世界とはまた異なつた観点を世界的な学問の場に発信していければと期待しております。

二十一世紀はグローバル化の時代であり、各研究機関はそのような情勢に対応する必要に迫られています。そのような状況においては、各文化の枠を超えて国際的な研究を推進し、国際的に競争力のある研究を進めていかねばなりません。政治大学は創立以來、人文学の研究成果によつて知られた大学で、宗教学大学院をはじめ、各分野の研究者はみな、死生学と何らかのかかわりを



周惠民氏

持っていますので、この会議は、政治大学全体にとっても、非常に重要な意味を持つものとなるでしょう。

あらためまして、今回、このような会議を開催できることをとても光栄に思います。この会議が両国の学者の交流を促進していくこと、また、会議の成功と、参加者のみなさまの健康を祈念いたします。ありがとうございました。

【司会】 続きまして、政治大学文学学院院长、周惠民先生からご挨拶いただきます。

【周惠民（台湾国立政治大学文学学院院长）】 竹内先生、蔡院長、その他のみなさま、おはようございます。

我々は、「朋有り遠方より来る、また樂しからずや」とよく申します。また『礼記』には、学ぶだけでは聞が十分なものにはならない、という言葉があります。本日このような会議に日台両国の学者が集うことで、我々は一人だけで学んでいるのではないということをあらためて実感し、心から嬉しく思います。

私は今回の会議の成果が大きいものであることを願うと同時に、このような機会が今後も続いていくことを期待しています。ありがとうございました。

【司会】 続きまして政治大学宗教学院長の蔡彦仁先生にご挨拶いただきます。



蔡彦仁氏

【蔡彦仁（台湾国立政治大学宗教学大学院院長） 校長先生、院長先生、竹内先生、その他参加者のみなさま、おはようございます。まず、宗教学大学院を代表しまして、竹内先生をはじめとする日本の学者のみなさんに歓迎の意を表したいと思います。

我々の宗教学大学院は、今までしばしば、欧米の研究所と協力してまいりました。しかし近年、我々はますます、東アジア——近くの国との交流が重要であると痛感するようになってきました。本年二〇〇九年は宗教学大学院の創立十周年の年に当たり、現在、ある一連の研究計画を進めているところですが、今回の東京大学との会議は、その最初のものとなります。これはたいへん光栄なことで、私どもも、たいへん喜ばしく思っています。

ここ政治大学は、台湾で唯一の宗教学大学院を有しています。今回の会議に参加する宗教学大学院のみなさんのご専門は非常に多様で、人文学、社会科学等、さまざまな学術的背景を持っていらっしゃいます。その中に死生学も含まれているわけですが、台湾の死生学というのは、すでに亡くなられた傳偉勳先生が一九九〇年代に押し進めました。我々の研究所には、この傳偉勳先生の学生に当たる先生が二名いらっしゃって、死生学に精通しています。

死生学という非常に重要な問題を、東京大学と今後も協力を深め、さらに研究を進めていければと期待しています。今回の会議で活発な意見が交わされ、大きな収穫が得られることを願っております。みなさまありがとうございました。



竹内整一氏

【司会】 続きまして東京大学の竹内整一先生にご挨拶いただきたいと思えます。

【竹内整一（東京大学教授）】 東京大学の竹内でございます。日本側を代表いたしましたして、ひとことご挨拶申し上げたいと思えます。今回の会議、日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」をこうして無事開催できますのも、ひとえに台湾側のみなさまのご尽力によるものと感謝しております。また、ただいま呉校長、周院長、蔡院長から丁寧なご挨拶をいただき、たいへん恐縮しております。

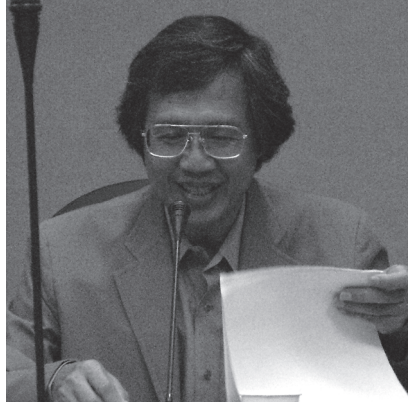
死生学という学問は、まだまだたく若い学問でありまして、我々もまだ手探りの状態で進めているところで、す。しかし、死と生のいとなみとなりますと、それこそどの文化、伝統にも分厚い背景があるものですので、そうしたものを今日のような会の中でもに検討していくというのは、たいへん意義深いことであろうと思えます。

「東アジアの死生学へ」というテーマは、西欧のものがだめになったから東アジアへという、安易な二者択一ではありません。申しあげましたように、台湾にも我々にも多くの歴史上の財産があるのであり、そのことをもう一度主題的に考えてみたいというのが、基本的な趣旨であります。台湾と日本の研究者がこうして一堂に会してこの問題について研究することが、必ずや死生学に大きな実りをもたらすであろうことを期待しております。



あらためて、今日の会議のために準備をしてくださいましたみなさまがたに感謝の意を表しまして、開会のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

【司会】 ここで台湾側から日本のみなさまに記念品を贈呈したいと思います。



黄柏棋氏

【司会】 それでは第一部の討論に入っていきたいと思えます。司会は国立政治大学宗教学大学院の黄柏棋教授、発表は東京大学の竹内整一教授で、「日本人の死生観について」というテーマでお話しいただきます。

【黄柏棋（台湾国立政治大学教授）】 それでは竹内先生、よろしくお願  
いいたします。